

「まず生徒の気持ちを受け入れる」 生徒観を変えてくれた恩師の助言

長崎県 諫早市立諫早中学校校長 寺井雄一 TERAI YUICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、寺井校長が語る。

辞職を覚悟した私を
諭し、守ってくれた

30代後半の頃に赴任したのは、荒れている学校でした。離島での勤務が長く、比較的素直な生徒に接してきた私にとって、生徒が授業中、教室に入らず、校舎の隅でたむろしたり、隠れてたばこを吸っていたりする光景は衝撃でした。生徒指導の難しさから担任の持ち上がり希望しない教師が多いこともあり、赴任1年目から3年生の担任を任せられました。授業だけでなく、生徒と一緒に部活や特別活動に取り組み、感性を共

有したいと考えていましたが、それ以前の指導で手一杯な状況でした。「なめられたら終わりだ」という気持ちで、問題行動を見つけては厳しく指導する、戦いのような日々が始まりました。ところが、生徒にも「教師になめられたくない」という意地があり、対立は深まるばかり。そんなある夜、自宅に電話がありました。問題行動が目立っていた生徒の兄貴分という卒業生からで、「明日、お前をやっつけに行く」と脅されたのです。「やれるものならやってみろ！」と言い返して電話を切った後、学校に迷感がかからないよう



てらい・ゆういち 小学校時代に会った先生の優しさや配慮の深さに感激し、教師を志す。旧厳原町立厳原中学校、諫早市教育委員会学校教育課課長などを経て、2007年、諫早市立諫早中学校に校長として赴任。専門は英語。

1974 (昭和49)
厳原町立厳原中学校
(現対馬市立厳原中学校)
に赴任

1989 (平成元)
時津町立時津中学校に
赴任。
森内清校長と出会う



1990年に「狸会」で
旅行した際の1コマ。
最前列中央、スーツ姿の
男性が森内校長

1998 (平成10)
諫早市立長田中学校に
教頭として赴任

2001 (平成13)
外海町立神浦中学校
(現長崎市立神浦中学校)
に校長として赴任

2003 (平成15)
諫早市教育委員会
学校教育課課長に就任

2007 (平成19)
諫早市立諫早中学校に
校長として赴任

に辞表を書き、家族に「教師を辞めるかもしれない」と伝えました。

翌朝、覚悟して学校に行き、森内清校長に報告しました。親分肌の森内校長は、慌てるそぶりを少しも見せず、「お前は短気かもんなあ。落ち着いてよく考えろ」と諭してくださいました。その一言で、興奮していた私の体からふっと力が抜けたのです。卒業生は学校に来ましたが、森内校長が先生方に「寺井を守れ」と指示し、学校全体で対応したことにより大事には至りませんでした。

教師の一生懸命さや 熱い思いが生徒を動かす

最初の1年間で、生徒に対して存在感を示せましたが、満たされない気持ちが残りました。生徒との深いつながりを感じられなかったからです。森内校長は私が悩む姿を見て、生徒を力で抑え込むのではなく、まずは受容的な姿勢を見せることの大切さを事あるごとに助言してくださいました。生来の短気は急に治りませんから、指導がすぐに変わったわけではありません。しかし、生徒を叱ろうとした時は常に森内校長の教えを思い出し、「まずは話を聞こう」

と一拍置くようにしました。すると、問題行動の多い生徒の素直な部分も見えるようになり、根っから悪いわけではなく、エネルギーを持って余しているだけなのだ、見方が変わっていききました。

森内校長は常々、「教師が一生懸命になる姿や熱い思いを生徒に伝えることが大切だ」とも話されていた。その教えを体現できたと思えたのが、二度目の3年生担任となった合唱コンクールの指導です。私も生徒の輪に入って共に練習に打ち込み、力と力ではなく、心と心で生徒と向き合いました。優勝ではありませんでしたが、誰もが充実した時間を過ごせたと感じました。

その年の卒業式後、教室に戻った時のことです。先に教室に入っていた生徒たちは整列していて、私が入ると一斉に合唱コンクールの歌を歌い始めたのです。生徒とのつながりを取り戻せた、教師をやっている本当に良かったと、心から実感した出来事でした。

私の座右の銘であり、先生方にもよく話すのが、宋名臣言行録にある「寛にして畏れられ、厳にして愛せらる」。教師は生徒に対して、管

教師は『寛にして畏れられ、

厳にして愛せらる』



理職であれば他の先生方に対して、寛容さと厳しさの両方が求められると考えます。この言葉を想起する時、森内校長の姿をよく思い出します。どっしりと構えて小言は言わず、時おり、急所を突くような厳しい指摘をされる。その存在自体が誰からも畏れられ、愛される校長でした。森内校長の風貌にちなみ、「狸会」という年1回の懇親旅行が、20年以上前から、先生が逝去された今も続いています。

昔に比べ、生徒や保護者との関係づくりなどに難しさを感じることも増えました。私の若手時代より今の若い先生の方が気苦労が多いかもしれません。そんな今だからこそ、時代の流れには乗り遅れず、しかし振り回されない。大きな視点を持ちつつ、森内校長のように先生方を温かく包み込み、誰もが心おきなく本気で生徒と向き合い、「教師ほど素晴らしい仕事はない」と実感する学校をつくりたいと思っています。